

〔論 文〕

# ソシール学説の一つの矛盾についての考察 —「言語記号の差異」について—

松中 完二<sup>\*1</sup>

## An Analysis of the Paradoxical Thought in Saussure's Linguistics — On “*Des differences dans la langue*” —

Kanji MATSUNAKA<sup>\*1</sup>

### Abstract

The Swiss linguist Ferdinand de Saussure's theories have been accepted in many academic fields all over the world. His theories in “*Cours de linguistique générale*” had a lasting impact on the research of the 20th century and remains today a subject of debates and controversies among linguistic researchers because of its many paradoxical statements.

One such area of debate is Saussure's concept of “*Des differences dans la langue*” which was developed in “*Cours de linguistique générale*”. In this paper, I use examples of paradoxical homonymic phenomena taken from everyday language interactions, as well as Saussure's rough drafts which were found in 1996 to clarify Saussure's intended meaning of “*Des differences dans la langue*”.

**Key Words** : Saussure, Cours de linguistique générale (CLG), Des differences dans la langue, homonymy, Saussure's rough drafts

### 0. はじめに

現代言語学は、その形成と発展の多くを1916年に刊行された Saussure の代表的書である *Cours de linguistique générale*（以下、CLG で表す）とそこで展開された学説に負っている<sup>(1)</sup>。しかしながら、Saussure の学説にはその主張内容において矛盾点や謎が数多く存在し、その最大の問題の一つが、“言語記号の差異”という考えである。この考え方から必然的に導き出される帰結は“言語記号の区別がなければ概念も区別されない”というものであるが、意味研究の立場から見れば、これは大きな間違いである。その最たる反証が、同音異義語の意味解釈である。国広哲弥(1985 : 18) が指摘するように<sup>(2)</sup>、言語における記号表現と概念は実際には必ずしも明確な形で平行せず、さまざまな反証も数多く散見される。

こうした問題について CLG から解答を求めることは容易ではない。その根本原因が CLG の記述の信憑性の問題である。CLG は1907年、1908～1909年、1910～1911年に、Saussure がジュネーヴ大学で三回にわたって行った一般言語学の講義を聴講した学生達の取ったノートを、Charles Bally(スイス1865-1947)と Albert Sechehaye(スイス1870-1946) が Albert Riedlinger (スイス1891-1913) の協力の元に再構成、統合して編纂、復元したものである。しかし Bally と Sechehaye は Saussure の講義に出席していない。こうして出来た CLG が Bally と Sechehaye による創作であり、Saussure の思想の断片が都合よく切り貼りされたパッチワークに過ぎず、それがつぎはぎだらけの CLG の記述の“ムラ”となって表れていることは、Saussure 研究家の間では一種の“暗黙の了解”であった。

ここに、Saussure 自身の主張と CLG における主張に隔たりや違和感を生じせしめ、歪曲や誤解が生まれてもそれは当然のことである<sup>(3)</sup>。このことは丸山圭三郎が Saussure 研究家によって早くから認識され、Godel による CLG の原資料 (1957)<sup>(4)</sup>や、Saussure の第二回と第三回の一般言語学講義に出席していた Constantin の残した講義ノートなどの資料を基に、CLG における主張や学説の内容が丸山の1970年代から80年代にかけての一連の著書において幾度となく修正されてきた経緯からも推し知ることができる<sup>(5)</sup>。

<sup>\*1</sup> 共通教育科

平成27年9月7日受理

また CLG における術語解釈をめぐる問題の煩雑さもそれに拍車をかける。しかも Saussure の学説には、言語学者を悩ませる内容的な矛盾箇所がいくつか存在する。その代表的なものが、「言語記号の対立によって概念の対立が見られ、記号には差異しかない」(1916: 166) という主張である。しかしそう言いながら Saussure は、同音異義や多義に関する問題については「この種の同一性は主観的な定義不能の要素」(1968: 243)<sup>(6)</sup> といった漠然とした説明で、自らの主張に対する否定とも矛盾とも、あるいは言い逃れとも取れるなんとも煮え切らない態度を取る。

CLG に見られる Saussure 学説のこうした不自然さと矛盾点について言語学的視点からいち早く気付いていたのが国広哲弥である。国広は、「ソシールは(理論的矛盾点に)大して悩むことなく、さりと逃げていように見受けられる」(1985: 19)、「ソシールは自説の誤りに気付かないまま、何の説明にもならない言辞を吐かざるを得なかった。(中略)これがあの明敏なソシールの言であるかと我が目を疑わせる」(2006: 20) などと、早くからその不自然さと矛盾点を繰り返し指摘してきた<sup>(7)</sup>。こうした事実は、何よりも丸山圭三郎ら Saussure 研究家の間でも認められ、それに対する学説の修正や解説が繰り返し試みられてきたことは、これまでの研究の歴史が物語っている。松澤和宏(2003: 425)に至っては、CLG における矛盾点を「支離滅裂に陥ったソシール」とさえ言い切っている<sup>(8)</sup>。

本書では CLG における「言語記号の差異」とその矛盾の問題を取り上げ、Saussure 学説の意味の問題について論考する。また2007年は Saussure の生誕150周年にあたり、奇しくも Saussure による一般言語学の第一回講義から100年、Godel による『「講義」の原資料』の刊行から50年目の一つの節目の年であった。そして2016年は、CLG の初版刊行から100年目にあたる。こうした中、意味研究の潮流とそこでの Saussure 学説の礎を振り返り、今日的な視点でその主張をもう一度問い直すことは決して無意味ではあるまい。

## 1. Saussure 研究の方向性

松澤和宏(2006: 99)<sup>(9)</sup>によれば、Saussure 研究の方向性は、①20世紀の CLG の受容過程と重なり、言語理論や哲学、人文学の観点からアプローチを行う Saussure の思想解釈の研究、② Saussure が遺した草稿を研究し、Saussure 学説の見直しや解釈そのものを更新する Saussure の文献研究、③ Saussure の言語思想を19世紀後半から20世紀初頭にかけての歴史的な文脈の中に位置付けながら理解を進める歴史的言語研究、の三つに大別されるという。本稿の立場は明らかに①であるが、21世紀になり Saussure 自身の手による CLG の手稿が数多く発見され、これまで Saussure の主張とされてきた CLG における学説の主張点や主要点が大幅に書き換えられ、②においても大きな前進を見た。それとともに、Saussure の学説を言語先行論として位置付けることでこれまで長年疑問視されてきた現象についても、いくつかは解決の糸口が見出されることとなった。本論では②を足がかりにしながら、①について解明を試みる。

加賀野井秀一(1995: 62)<sup>(10)</sup>は Saussure 研究の目指す方向に、① Saussure 学説の矛盾や亀裂や空白をもふくみこんで共に思索し、常に言語の謎に直面していこうとする方向性と、② CLG が未だ不完全であることを第一の問題にし、原資料に立ち返ることでそこでの様々な不整合の問題を解決し、整合化を図ろうとする方向性の二つをあげる。そして現時点で Saussure の遺産を振り返る意味は、前者をおいて他にはないとする。加賀野井が言うように、今更 Saussure の原資料に当たりそこでの内容を精査して某々より何年早くこれこれの事を発見していたなどと詮索をしても、学問的には不毛であろう。

②の Saussure の文献研究においては、これまで三つの大きな指標があった。第一が Robert Godel (1957) による *Les Sources Manuscrites du Cours de Linguistique Générale de F. de Saussure*。 (『一般言語学講義の原資料』) である。第二は Rudolf Engler (1968) による *Cours de Linguistique Générale, Edition Critique* (『一般言語学講義校訂版』) である。第三は Tulio de Mauro (1967) の *De Ferdinand de Saussure Corso di Linguistica Generale Introduzione, traduzione e commento* (山内貴美夫訳。1976. 『ソシール一般言語学講義校注』而立書房) である。これらの書はわが国ではこれまで丸山圭三郎を中心に精力的に紹介、解説されてきた。そしてここに来て最も大きな四つ目の指標が加わった。それが小松英輔と松澤和宏らによる、1996年に発見された Saussure の自筆草稿の研究やその一連の翻訳である。本稿の目的は①の立場に立ち、こうした最新の Saussure 研究の成果を基に、言語記号の差異という問題に対して解答を与えることである。

## 2. Saussure 研究の新時代

1996年に Saussure の自筆手稿が発見され、Saussure 研究史上間違いなく最高峰の成果である小松英輔らによる修正や解説、松澤和宏らによるその翻訳、出版という山場を迎えた現在、かつての Bally と Sechehaye による CLG は何の

意味もなさない過去の遺物であり、もはや一顧だにする価値も見出されないとする向きもあろう。しかし、果たしてそうであろうか。言語研究において Saussure の学説と CLG は昔も今も基本的入門書であると同時にバイブルであり、そこでの様々な反論や異論はあるにせよ、科学の対象として言語を位置付け、言語を記号として捉えるという言語研究における基本的姿勢は CLG における Saussure 学説の真髄であり、それを通してわれわれが言語研究に接する第一歩であることには変わりがないのである。また多くの Saussure 研究者が異口同音に言うように、CLG と言えば昔も今も Bally と Sechehaye によるものであり、Saussure の学説を一般のものとして世界中に知らしめ、また普及させたものは他ならぬ Bally と Sechehaye による CLG なのである。

ただし CLG での学説と Saussure の思想解釈について触れようとすると、CLG に巣くう問題の深遠さゆえに、われわれは最低限度の手順を踏む必要性に迫られる。それなしに Saussure 学説の批判も賛同もありえないし、それ以前にそもそも批判も賛同も成立しない。しかしその手順は困難をきわめる。そしてようやく辿り着いた Saussure の思想は、われわれを言語の問題から遠ざけてしまうのに十分である。正式な手順を踏もうとすれば、言語の問題に到達する前に、その手続きと解釈だけで人生の大半の時間を費やしてしまうことになるであろう。われわれ言語研究者はどこまで行っても言語現象とそれを引き起こす原理について解明しようとする立場から Saussure を読み、そこから解答を求めようとする。本論が目指すのは Saussure 学説の掘り起こしやそこでの思想内容の修正ではなく、あくまで意味研究の立場から自ら解答を探り、Saussure 学説の不備と不整合の問題を洗い出し、そこになんらかの形で解答を与えることである。それが Saussure の自筆草稿であり、それらの翻訳である。

本稿では、以下の 5 冊の最新の資料に全幅の信頼を置き、これらを Saussure 学説の真実とし、また Saussure の生の声として Saussure 学説の拠り所とする。

1) 小松英輔 (1993) の “*F. de Saussure Cours de Linguistique Générale. Premier et troisième cours d'après les notes de Riedlinger et Constantin.*” (Collection Recherches Université Gakushuin n° 24) とその翻訳である相原奈津江・秋津伶訳 (2009) の『フェルディナン・ド・ソシール一般言語学第三回講義〈増補改訂版〉』(エディット・パルク)。

2) 小松英輔 (1993) の “*F. de Saussure Troisième cours de Linguistique Générale (1910-1911) d'après les cahiers d'Emile Constantin.*” (Pergamon Press) ならびに小松英輔 (1994) の『ソシール自筆原稿の研究』(平成 6 年～平成 8 年度科学研究費補助金基盤研究 B(2)研究成果報告書課題番号 06451091) とその翻訳である相原奈津江・秋津伶訳 (2003) の『フェルディナン・ド・ソシール一般言語学第三回講義 (1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録』(エディット・パルク)。

3) 小松英輔 (1996) の “*F. de Saussure Premier Cours de Linguistique Générale. (1907) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger.*” (Pergamon Press) とその翻訳である相原奈津江・秋津伶訳 (2008) の『フェルディナン・ド・ソシール一般言語学第一回講義リードランジェによる講義記録』(エディット・パルク)。

4) 小松英輔 (1997) の “*F. de Saussure Deuxième Cours de Linguistique Générale. (1908-1909) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger et Charles Patois.*” (Pergamon Press) とその翻訳である相原奈津江・秋津伶訳 (2006) の『フェルディナン・ド・ソシール一般言語学第二回講義 (1908-1909)』(エディット・パルク)。

5) Bouquet, S. & Engler, R. (2002) *Ferdinand de Saussure, Écrits de linguistique générale.* (Gallimard) とその翻訳である松澤和宏校註・訳 (2013) の『フェルディナン・ド・ソシール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』』(岩波書店)。

ただし松澤自身も認めるように、松澤訳 (2013)<sup>(11)</sup> の最新の Saussure の自筆草稿自体もまだ断片的な部分が多いのも事実であり、これまでの Saussure 研究の歴史がそうであったように、現時点で最新かつ最良のものと思われる小松や松澤らの研究成果も、今後新たな追加資料の発見などにより主張内容に間違いが発見されたり、主張自体が塗り替えられる時が来るかもしれない。

しかし新たな言語研究に向け、過去の贖罪としてわれわれが何を見誤り、どこを誤解したかを見つめ直すことは決して無意味ではない。むしろ同じ過ちを犯さないよう警鐘の意味も込めて、その誤りを広く知らしめるべきではないのか。また、CLG における整合性や矛盾点の問題の責任が Bally と Sechehaye にあるとしたら、Saussure は不当に批判されていることになる。Saussure の本来の言葉と言語学の問題を突き合わせてそこでの不整合や矛盾点に解答を与えることは、後世に残された言語研究家と Saussure 研究家の双方に課せられた使命であろう。更には、特に意味研究において多くの点で Saussure の言語観に痛烈な批判を展開してきた国広哲弥でさえ、見方を変えれば熱心な Saussure 研究家とすることができる。なぜなら、多くの言語研究家は自らの研究で得られた発見や結果を Saussure の主張と照らし合わせたりしないし、それゆえにその不整合の問題や矛盾点に気づくことすらないから疑問も批判も生れないのである。もっと言えば、Saussure を読んでさえない言語研究家がなんと多いことか。その意味で、常に自論とそこでの発見

を Saussure の主張と照らし合わせ、その主張と現実の現象における食い違いに素直に疑問を呈し、その理由と原因を追求し続けた国広は真の言語研究家であり、同時に真の Saussure 研究家なのである。

### 3. 言語記号の差異

Saussure の学説をめぐる第一の問題点が言語記号の差異に関する主張である。CLG はこの点について、以下のよう

“Tout ce qui precede revient à dire que *dans la langue il n’y a que des differences*. Qu’on prenne le signifié ou le signifiant, la langue ne comporte ni des idées ni des sons qui préexisteraient au système linguistique, mais seulement des differences conceptuelles et des differences phoniques issues de ce système.” [斜体部原文ママ] (1916 : 166)

“以上述べてきたことは要するに、言語には差異しかない、ということに帰する。[中略] 所記をとってみても能記をとってみても、言語がふくむのは、言語体系に先立って存在するような観念でも音でもなくて、ただこの体系から生じる概念的差異と音的差異とだけである。” [下線部原文ママ] (1940 : 168)

このことから Saussure が体系に属する要素の価値がそれぞれ異なり、互いに連合関係にあるという性質をことのほか重要視していたことがうかがえる。この主張は、連合関係の性質を明らかにすることで単語の意味が正確に決定されるということに他ならず、それはこれまで国広が指摘してきたように、単語の意味に体系性を認めることから得られる帰結は、記号の対立がなければ意味の違いも存在しないということになる。しかしながら Engler 版<sup>(12)</sup>の断章番号1764では、

“Mais ensuite, si nous considérons cet autre point que dans la même phrase je puis dire par exemple: *son violon a le même son*, — si précédemment je m’étais appliqué sur l’identité du son, je verrais ici que la tranche auditive *son* répétée deux fois ne représente pas une identité. De même si on surprend la même suite/[295] auditive dans «cet animal *porte plume* et bec» et «*prête-moi ton porte-plume!*», nous ne reconnaissons pas qu’il y a là une identité. Il faut qu’il y ait identité dans l’idée évoquée. Elle comporte, cette identité, un element subjectif, indéfinissable. Le point exact où il y a identité est toujours délicat à fixer.” [斜体部原文ママ]

“これがまず一点目ですが、次に、別の文を例に出して、二点目を考えてみます。son violon a le même son [訳注：彼の(ソン) バイオリンは、同じ音(ソン) だ]。私が音の同一性<sup>イダンテイテ</sup>だけにこだわっていれば、二度繰り返される son という聴覚の切片が、ここで同一性を表していないことがわかるでしょう。

同様に、cet animal porte plume et bec [訳注：動詞 porter の三人称単数形+目的語 plume と bec。この動物は羽根と嘴を持っている、の意] と prête-moi ton porte-plumes [ママ] [訳注：一つの名詞 porte-plumes。あなたのペン軸を私に貸して、という意] の中で、同じ音の繋がりに気付いても、私たちはそこに同一性<sup>イダンテイテ</sup>があるとは認めないでしょう。同一性は呼び起こされる観念の中にこそあった、と言うべきなのです。

この同一性は、定義できない主観的な subjectif 要素を含んでいます。〈同一性がある〉という点を厳密にするには、いつも細心の注意が必要です。” [太字と下線部原文ママ] (相原奈津江・秋津伶訳, 2003 : 168)

という記述が見られ、音形による差異のみを認め、音形から得られる観念には差異を認めず、signifiant と signifié が同一でないことを主張している。この問題に対して、丸山 (1983 : 213)<sup>(13)</sup>は、

“同音と見做される二つの語が、それぞれ別々の価値をもつのは、連辞の次元で他の語と結びつき得る〈結合値〉(ヴァランス) が異なっているからであり、これが連辞の軸上での差異化を可能にしているからにはかなりません。(中略) ②実質的な支えなしにも語る主体の内に対立化した差異として意識される単位、という二つの概念があるのです。” [下線部原文ママ]

と、langue の中に連辞を認めることで同一の記号表現であっても連辞上で異なった結合値を有し、異なった signifié を持つことは可能であると説明する。このことは Saussure 自身、

“Nous parlons uniquement par syntagmes, et le mécanisme probable est que nous avons ces **types de syntagmes** dans la tête, et qu’au moment de les employer, nous faisons intervenir le groupe d’associations.”

[太字原文ママ]

(Riedlinger のノート, 断章番号2019)

“われわれが言葉を発するのは、連辞によってのみである。おそらくそのメカニズムは、われわれが連辞の型を脳の中に有しており、それらの型を用いる時には連合語群を介入させるのである。” (松中訳)

“Dans la proposition tout se réduit au sujet et au prédicat, (中略) à la conjonction (vocatifs à réserver). Mais le sujet et le prédicat n’ont rien à voir avec les ‘parties du discours, distinguées sur un autre principe’.” (手稿 15, 断章番号3306)

“文はすべて主語と述語とに還元される。しかしながら主語と述語は、他の原理にもとづいて区別された《品詞》とは一切何の関係も持たない。” (松中訳)

と述べており、ここから丸山(1981: 101)<sup>(14)</sup>の, “ラングに属する事実の中にさえ, 連辞が存在することは間違いない” という苦し紛れとも取れる説明が生じたであろうことは容易に推測がつく。

しかし, 同音異義語の発生の原理が連辞で全て解決されえないことは, 国広 (1985)<sup>(15)</sup>で証明済みである。連辞関係が同音異義語の成立を決定付ける根拠ではないとすれば, 次に考えられるのが場面や文脈の助けということである。しかし場面や文脈の助けがないと記号内容の違いが成立しないというなら, 裏返せばそれは記号の対立だけでは記号内容の区別は出来ないということを自ずと認めてしまうことになり, Saussure の学説は矛盾におちいり, 破綻を強いられる。このことを証するように, 言語記号に対立する差異がなくとも概念の形成が見られることは, 現実には枚挙に暇がない。

こうした同音異義の問題については, 国広 (2010: 3 - 4)<sup>(16)</sup>の次の指摘が端的に的を射ている。

“さらに構造主義的な立場に立つと説明に困る意味現象がいろいろ出てくる。まず「川」と「皮」のような同音異義語がある。音声は全く同じなのに、われわれは異なった意味を結びつけて混同することがない。場面・文脈の助けがあれば曖昧であることはまずない。多義語もまったく同じで現象である。われわれの現実の言語行動は具体的な場面の中で行われるので、混乱が起こることはない。この大切な場面をソシールは言語にとって本質的なものではないとして、研究対象からはずしてしまうという2つ目の間違いをしている。”

一方, 町田健 (2004: 125)<sup>(17)</sup>は人間の脳の負担という観点から同じく「川」と「皮」という同音異義を例に挙げ, その発生の原因を以下のように説明する。

“しかし、「私はカワで泳いだ」と言えば、その「カワ」は「川」に決まっていますし、「木のカワを剥いだ」と言えば、「カワ」は「皮」のことだとすぐに分かるのですから、たとえ同音異義語があったとしても、意味を理解するのに大きな障害があるということはないのが普通です。つまり、完全な同義語の存在が人間の記憶に負担をかけるのに比べて、同音異義語については、意味の区別をするための負担がそれほど大きくないので、不合理である度合いが小さいのです。おそらくこういう理由で、どんな言語にも同音異義語があるのではないかと考えられます。”

脳の負担が軽減されるというのはその通りだとしても, 「川」と「皮」ならばその連辞関係も異なり互いが極端に離れていて混同する危険性は少ないが, 国広 (1985: 20-21) が「雲」と「蜘蛛」の例を上げて例証するように, 排他的な連辞関係から同音異義の説明をすることは不可能である。加賀野井 (2004: 96)<sup>(18)</sup>は, 「川」と「河」など類義語の違いは現実に存在する自然物の川 (あるいは河) そのものの要請によるのではなく, 言語の方が創り出す区別であると結論付けている。これは厳密に言えば, 言語を拠り所としている人間が, 言語によって作り出しているものである。そしてそれは, 国広 (2010: 4) の概念によるものという指摘と何ら隔たりがなく, ここにいたっても Saussure の記号の差異という考えでは同音異義の説明に何ら解答を与えることができない。

また瀬戸賢一 (2005)<sup>(19)</sup>は, チーズケーキの味と意味の例を挙げて, われわれの身の回りにある言葉が記号の対立よりもそれ自体として存在する「素朴な実在論 (naïve realism)」に基づいて成立すると論じる。確かに山は海との対比

で存在が確定するわけではなく、われわれの存在以前にも存在以後にも山は山としてわれわれの認識とは無関係に存在し続けるのであり、それに山という語を命名するのも、そこから自然の巨大な突起異物を認識するのも、われわれ人間側の勝手な所作なのである。しかし Saussure に従えば、それすら世界に存在する事物に言語での名前をつけるだけの行為にすぎない「言語命名論」として否定する。しかしそれにもかかわらず言語の存在それ自体が事物に名づけをする働きを有するのである。丸山圭三郎（1981：206）はこうした事実について、Merleau-Ponty の言葉を引き合いに出し、以下のように説明する。

“さきほど、ソシユールは《言語命名論》を否定する、と書いた。それにも拘らず、コトバは事物を名づけるのである。すなわち、既に切り取られカテゴリー化された非連続体にラベルを貼るといった意味での命名ではなく、命名することによって連続体を非連続化し、実存を転調し、事物の中に捕えられていた意味を開放するという意味での、真の命名作用を持つのが本質的な言語なのである。（中略）対象を名づけること、それは対象を存在せしめること、あるいは対象を改変することにほかならない。こうしてかつては事物に従属していたコトバ、手段としてのコトバ、コトバの彼方にある現実と意味の表現としてのコトバは、逆に事物がそれに従属するコトバ、事物との事項の関係を樹立し、それに意味づけるコトバとなつて、コトバとモノの関係は逆転し、コトバはその自立性を回復する。コトバは、何か外的な目的のための一手段ではない。それはそれ自体の中に、その価値と、その世界観をそなえた自立体系である。”〔傍点部原文ママ〕

結局この説明はめぐりめぐって身の回りにある言葉が記号の対立よりもそれ自体として存在する「素朴な実在論（naïve realism）」を認めるものにしかっていない。こうした記号と意味の問題に対して、町田健（2004：68）は次のように、

“ただし、ある単語が要素として含まれる体系を設定して、その体系に属する他の単語の意味とは違うと言う性質だけで、その単語の意味が正確に決定できるわけではないことはもちろんです。”

と、Saussure 学説の不備を暗に認めるような説明に終始する。

この種の問題に対する解答の一つが色彩語彙や成績標語の体系を現わす語彙、また役職名や階級名であるが、それすら国広（2006：20）<sup>(20)</sup>が指摘するように、それ自体が色彩や職場、組織といった構造における体系の中での位置付けを意識した人工的なものであり、自然の中での事物の存在などはこうした体系とは無関係に存在し、われわれ人間が最初からそうした事物の構造的な体系に気を配りながら事物の名づけをしてきたわけではない。あるいはその構造的な体系性すら気づかずに名前をつけ、その存在を認識していることの方が多く、また自然であろう。最初に意味の違いが意識されていなかったら音素も成立しないし対立の体系も成立しないということで、したがって差異も見られないはずである。Saussure は意味の差は音声、更には対立関係がなければ支持されないと考えたが、これは本末転倒である。この点については、国広哲弥（2006：18）も場面との要素を上げながら、

“場面文脈の助けがなければ意味の違いが保てないということは、取りも直さず「記号の対立だけでは意味の区別は出来ない」ということであり、ソシユールの対立記号論的構造主義はここで崩壊の止む無きに至る。”

と、その根本的誤りを指摘する。そしてこの問題は、町田健（2004：67-68）においても次のように Saussure 学説の不備を暗に認めるような説明に終始する。

“単語の意味に体系性があることから出てくる重要な帰結は、言語が違えば単語の意味もそれぞれ違ってくるということです。異なった言語でまったく同じ意味をもつ単語がないことは、一つでも外国語を学習してみれば分かります。（中略）日本語と英語では、全体としての単語の体系が違うのですから、体系の性質からして、この二つの言語で同じ意味をもつ単語が存在しないのは当然のことです。（中略）ただし、ある単語が要素として含まれる体系を設定して、その体系に属する他の単語の意味とは違うと言う性質だけで、その単語の意味が正確に決定できるわけではないことはもちろんです。”

更に続けて町田（2004：68-69）は、

“『講義』には、単語の意味を決定するための具体的な方法は書かれていませんでしたから、後の言語学者たちには、その方法を見つけ出すという課題が残されたのでした。（中略）このように、コトバに含まれる単語の意味以外の要素にも体系性があることは容易に推測できるわけで、体系と連合関係という概念は、コトバの本質を解明する上で考慮しなければならない最も重要な要因の一つです。それをソシールがはっきりと提示したことは、言語学の歴史では特筆すべきことだと言えます。”

と述べて、結局自らが認める体系の差異と記号の対立に伴う意味の問題には答えていない。これは結局これまで Saussure 論者が繰り返してきた態度と同じで、Saussure 学説の言語学史における意義と価値（そのこと自体は私も素直に認めている）を持ち上げながら、ここで提示された意味の問題に対する不備とその解答を示すことはおろか、それは後世の研究者に委ねるとして問題の本質から逃げ、何の回答も進展も見られないままである。もっともそれは、Saussure の遺稿やそれにまつわる歴史的資料から Saussure の直接の考えを紐解くのが主な仕事である Saussure 文献学の方性と性質からすれば致し方ないことではあろう。そうした主張や学説に基づいて現実の言語現象をどう扱うかというのは言語研究家の仕事であり Saussure 文献研究家の仕事ではない以上、こうした態度はどこまで行っても平行線をたどるのみであろう。

#### 4. 記号と意味の結びつき

先に記号の差異のみでは記号内容の区別が不可能で、場面や文脈の助けがないと記号内容の違いが成立しないと述べたが、その例は言語学的には数多く存在する。たとえば「シリツ大学」という場合、その signifiant としての音形からは「私立大学」か「市立大学」かの区別がつかない。よって、そういう場合にわれわれが講じる手段は、「ワタクシリツ大学」や「イチリツ大学」とあえて説明的に言い変えることで、文脈の中でその差異を示すことにより正確な記号内容を伝え、共有を図ろうとするやり方である。同様に「カガク」では「科学」なのか「化学」なのか判断がつかないため、わざと片方を「バケガク」と呼んで区別するのも然りであるし、「カガク」だけであれば「歌学」ということも十分にありえる。そのどれかを決定するのは音的な特徴による差異か、あるいはあくまで場面や文脈の助けによる。

たとえば、2013年6月12日に流れた日本野球機構の統一球の不正のニュースはその好例であろう。それまでの古いボールから新たに統一した野球のボールに飛びやすい細工が仕掛けられていた問題で、謝罪会見の席上、コミッショナーの発言に「古い新しいという方のシンキウですが…」という前置きがなされた。問題の性質上、この「シンキウ」は新たに統一された「新球」と取られかねず、意味理解に混乱をきたす。そうした混乱を避けるためにあえて先のような言い方をして「新旧」と「新球」を取り違えないように念を押したのである。この場面で「シンキウ」を「鍼灸」と取る人間はいないであろう。それは場面の中での言語運用という側面から、ここでの文脈で共起しにくい言葉だからである。こうした意味の違いを成立させるのは、まずは音的な特徴による差異か、または場面や文脈の助け以外のなにものでもない。これ自体がすでに Saussure 学説の記号の対立と意味の区別という主張に対する十分すぎる反証である。

記号と意味の問題に対して Saussure 論者が有効な解答を示さない点について更に立ち返れば、その原点的指摘は丸山（1983：211）に行き着く。丸山はこの問題について sens の「意味」、「感覚」、「方向」という三つの異なる意味について Fig. 1 のような図で解説を試みるが、この図が全く意味をなさないのは国広（2006：19）の指摘を持ち出すまでもない。

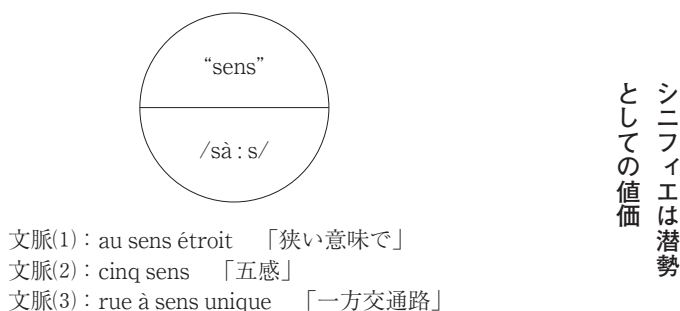


Fig. 1

これは Saussure が示した図とは全く異なるものであるばかりでなく, sens の記号表現とそれに伴う音形を示しただけの丸山の意味不明な創作に過ぎず, 言語学的には全く意味をなしていない。また, シニフィエは潜勢としての価値と説明を加えるが, 潜勢としての価値とは何なのか全く意味不明である。本来ならこの図は Fig. 2 のようにならないといけない。

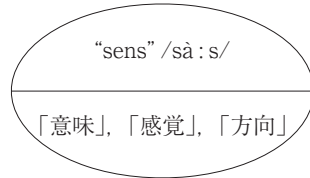


Fig. 2

そして仮に, sens の「意味」, 「感覚」, 「方向」という異なる三つの意味が記号の対立から生まれる同音異義であるというのであれば, Fig. 3 のような構図を取らなければいけないのであるが, 現実はそのような図ではない。sens という記号は異なる三つのどの意味であろうとその音形は同一のものであり, よってこの図が意味論的にもいかに意味をなさないのであるかは疑問の余地がない。

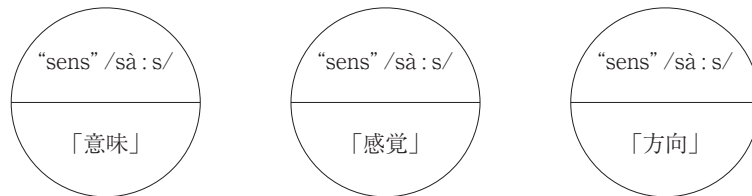


Fig. 3

意味論者は sens の「意味」, 「感覚」, 「方向」という異なる意味に有契性を感じ取り, これが互いに関連する派生関係にある多義であることの証明に腐心するのであるが, Saussure 論者や哲学者はそういう点にはあまり関心がないらしく, 外延や内包で現実世界と観念世界の切り取りといった議論に終始するのが常のようである。言語学者の研究対象であり最大の関心事であるのは, sens から派生する「意味」, 「感覚」, 「方向」という三つの意味が, それぞれ関連性を持つ多義なのか, また多義であるならばどのようなメカニズムでこうした三つの異なる意味を生み, それがどのように Saussure の唱える記号の差異なしで意味の成立を生むのかという部分の解明である。こうした根本的かつ基本的な問いにさえ丸山の図は答えてはいない。

しかし, 実際の Saussure の言葉は違った。まず signifiant と signifié の関係を Fig. 4 のように説明しているのは Bally と Sechehaye による CLG での図ともさほど変わらない(ただし上下間の矢印が消えていることには着目すべきである)。

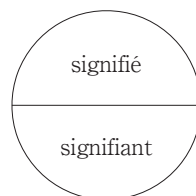


Fig. 4

そして意味の不明確さに対して連辞から解答を求められない点については,

“Ce qu’il y a autour de lui syntagmatiquement, c’est ce qui vient avant ou après, c’est le contexte, tandis que ce qui va autour de lui associativement, cela n’est dans aucun contexte, vient de la conscience (uni par lien de la conscience, pas d’idée d’espace)

L’entourage d’un mot doit être distingué syntagmatiquement et associativement. (Placé dans le syntagme, le mot agit en vertu de ce qu’il a un commencement et une fin, et de ce que les autres mots doivent être avant ou

après). (中略)

Objection: est-ce que le syntagme n'appartient pas à la parole et ne mélangeons-nous pas les deux sphères *langue-parole* pour distinguer les deux sphères *syntagme-association*?

〈C'est en effet ici qu'il y a quelque chose de délicat dans la frontière des domaines〉. Question difficile à trancher. En tous cas même dans les faits qui appartiennent à la langue, il y a des syntagmes. (中略)

Il y a entre autres toute une série de phrases qui sont toutes faites pour la langue et que l'individu n'a pas à combiner 〈lui-même même〉. Dans le syntagme point délicat : la separation entre parole et langue.” [斜体部原文ママ] (Eisuke Komatsu, 1993 : 354-355)

“連辞的なものは、前後に位置し、それが文脈なのです。けれども、連合的に周囲を囲んでいるものは、どんな文脈の中にもなく、意識〈(空間の観念ではなく、意識が結ぶもの)〉から来ます。

語を取り囲むものが連辞的か、連合的かは見分けられるはずです。

〈始まりと終わりを持ち、また、他の諸語の前か後かで連辞の中に置かれた語(モ)は機能します。〉(中略)

異議。連辞は言葉に属さないのではないでしょう [か]。また、私たちは、二つの領域(連辞的—連合的)の区別のために、二つの領域(言語—言葉)を混同していないでしょう [か]。

〈結局、領域の境界は微妙なものです〉。解決困難な問題。

いずれにせよ、言語に含まれる出来事にも、連辞が同じようにあります。(中略)

特に既成の言語の中に、<sup>ラング</sup>個<sup>アンデ・ヴィデュ</sup>が〈自分では〉組合わせられない—続きの文があります。

<sup>パロール</sup>言葉と<sup>ラング</sup>言語の間の境目が、連辞の微妙な点なのです。” (相原奈津江・秋津伶訳, 2003 : 260-261)

と、すでに Saussure 自身の言葉で先の問題に対する解答とも取れる主張をしているのである。

Bouissac (2010)<sup>(21)</sup>も指摘するように、Saussure の考えによれば、記号はその意味ゆえに存在しており、ある意味はその記号ゆえに存在しており、記号と意味は記号間にある差異ゆえに存在していることになる。ある音声パターンはそれ自身が変化と対立のシステムの中である位置を占めている言語に属していると認識される時においてのみ、記号として成立することになる。

そして音素の数は全体でも数十個にすぎず、有限である。そこから形成される記号の数も数十万個で有限である。しかしそこから生み出される観念は無限である。われわれは数十個の有限の音から、われわれの世界を構成するあらゆる事物、観念、心情といった無限の観念を生み出し伝達し、理解しているのである。差異と関係性のある音素の体系については弁別素性の数を比較すれば容易にその対立の体系も成立する。しかしこれが記号と結び付いて意味の成立となると、1対1対応での音素列と意味という単純なものではなく、問題は複雑である。最初に意味の違いが意識されていなければ音素も成立せず対立の体系も成立しないのであり、したがって差異も見られないということになる。Saussure は意味の差は対立関係がなければ指示されないと考えたが、これは本末転倒になる。

また Hawkes (1977)<sup>(22)</sup>の以下の指摘も、同じ問題を突いたものである。

“However, much more crucial is the fact that by no means every possible contrast is registered as significant by the language. In fact, large numbers of contrasts are ignored by it, and only a relatively small proportion of the differences that actually occur between sounds are *recognized* as different for the purpose of forming words and creating meaning.” [斜体部原文ママ] (Hawkes, 1977 : 23)

“しかしながら、さらにもっと決定的に重要な意味を持っているのは、ありうるすべての差異がその言語に有意義なものとして登録されるわけでは決してないという事実である。事実そこでは差異の多くは無視されており、音と音の間に実際に起こる差異のうちの比較的わずかな割合のものだけが語を形成し、意味を創造する目的のために用いられるようになったものとして認知されるにすぎない。” [傍点部原文ママ]

(池上嘉彦他訳『構造主義と記号論』pp. 31-32)

この問題に対しては、町田 (2004 : 62-64) も次のように述べている。

“一つの言語に完全な同義語がないのだとすれば、その言語がもっているすべての単語の意味はそれぞれ異なっていることになります。だとすると、ある一つの単語の意味を決定するためには、他のすべての単語の意味とは「違う」という性質を必ず考慮に入れなければなりません。別の見方をすれば、ある単語の意味は、

他の単語の意味との関係で決定されるということです。

ソシュールは、何らかの対象が作る集合で、その要素の特徴（ソシュールの用語では「価値」）が他のすべての要素との関係で決まってくるという性質をもつものを「体系」と呼びました。ある言語がもっている単語の集合は、それぞれの単語の意味（単語にとっての価値）が他の単語との関係で決まるのですから、この定義からして体系だとすることができます。（中略）ところが単語の集合では事情が異なっていて、あらかじめ意味が決まっているという単語はなくて、同じ集合に属する単語にどんなものがあるかが分からなければ、正確な意味は決定できないわけです。このように、要素の価値があらかじめ決まっているのではなくて、他の要素との関係でしか決定できないという点が普通の集合と体系の重要な違いです。要素の価値があらかじめ決まっていなとすれば、ある体系に含まれる要素とそうではない要素が必ずしも一義的には決まらない場合もあることになります。”

更に国広（1985：22）はこの問題について、以下のように追及する。

“記号表現と記号内容が決して紙の表裏のように不可分に結び付いているのではないことを示していると言えよう。記号表現と記号内容は、心的な連合関係にあるというのが、その本質的な姿であろう。連合関係は必ずしも緊密なものではなく、どちらか一方が認知されるだけに終るといような不完全な事態が生じることも十分にあり得ることである。”

意味論者からすると、まさしくこうした現実の矛盾点に Saussure 学説はいかに解答を与えてくれるかを知りたいのであるが、町田（2004：82-83）の以下の説明を見ても、やはりこれまでの Saussure 論者とと同じく理論の原則論や理想論に終始していて、何ら解答が示されていない。

“これとは逆に、同じ音素列なのにまったく異なる意味を表す単語を「同音異義語」と言って、日本語の「皮」と「川」や英語の night〈夜〉と knight〈騎士〉のように、どんな言語にもそれなりの数の同音異義語があります。（中略）話し手から聞き手へと同じ意味を伝達するのがコトバの本来の働きなのですから、この働きが最も効率よくできるためには、同音異義語などないに越したことはありません。したがって実際のところは、意味が違えばそれに対応する音素列も違うのがコトバとしての原則だと考えていいと思います。”

同様に加賀野井（2004：93-96）もフランス語の rivière と fleuve や日本語の「川」と「河」を例にあげてこうした問題を論じているが、この現象が起きる原因の究明には至っていない。しかも多くの Saussure 論者が同音異義の発生理由を連辞関係に求めるが、それさえ有効な論拠にはならないのはすでに国広（1985）が証明済みである。「記号表現の差異があつてはじめて記号内容の差異が生じる」という Saussure 学説では、現実に存在する反証としての同音異義という現象に対する解答を何ら示すことは出来ないのである。

河本英夫（2007：189）<sup>(23)</sup>はこの問題について、

“差異の出現は、差異化の結果の二つの対比項に改称出来ない。それ以上に、差異化は本来発話行為（パロール）で起きているはずである。このときやや厄介な問題が生じる。言語学の対象として設定された言語（ラング）は、一般的には観察者から捉えた言語的対象であり、歴史的な安定性をもつとはいえ、人為的設定である。ところが発話行為は言語表現を生み出すのであって、まさにそれが行為であるがゆえに、それじたいを全面的に対象化することはできない。”

と、示唆的な意見を述べている。

Saussure の学説では記号は相互の対立から初めて記号としての機能を果たすのであり、言い換えればそれは、最低二個の異なる記号がないと機能を発揮しないということである。しかしこれまで見てきたように、現実是这样ではない。また国広（2006：18）では、車のクラクションの同一の強さと長さの音形にもかかわらずそのメッセージの違いについて記号の対立の不在をあげているが、これなども Saussure 学説における言語記号の差異という考えの矛盾を突いたものである。このことは先に挙げた町田（2004：62-64）の説明においても原理に反する現実を認めながら、それに対する有効な解答は見られずじまいである。

また加賀野井（2004：89）では、新語の出現や語の消滅は体系の中での辞項が消えたり新たに加わったりすることではなく、体系の組み換えによって起こるとしている。しかし体系の組み換えがなぜ、またどのような原理で起こるかにについては触れられていない。この問題に対しては、結局のところわれわれは依然として、

“言語記号の成立をソシールのように記号の対立から始まるとするとあらゆる難問に遭遇するが、ソシールが最初に批判の対象にした一般の考え方である認知内容から出発することにすれば、いろいろな言語現象もよく理解でき（例えば新語の発生）、直感的にもよく理解できる。”

という国広（2006：21）の言葉に頼るしかないのであろうか。

## 5. Saussure の言葉—まとめにかえて—

しかし Bouquet & Engler（2002）では、Saussure の驚くべき言葉が次々と出てくる。しかもそれは CLG におけるこれまでの言説を根底から覆すような内容ばかりである。Bouquet & Engler（2002）の邦訳である松澤（2013：70-75）では、一つの意義に対する記号の多様性と、その反対の現象である記号の単一性に照応する意義の多様性について仔細に考察されており、これまでの疑問に対する回答とも取れるような記述が付されている。更に驚くべきことは、松澤（2013：73）における“語が〈物質的な〉対象にアプローチするのは、最初から観念によってでしかないのである”という Saussure の記述は、先の国広の“一般の考え方である認知内容から出発することにすれば、いろいろな言語現象もよく理解でき（例えば新語の発生）、直感的にもよく理解できる”という指摘と全く同じことではないか。Saussure は一般の考え方である認知内容から出発することを否定などしていなかったことになる。それどころか最初から国広と同じ指摘をし、今日の認知言語学に通じる意味の捉え方を示唆していたことになる。また、記号の差異という問題に対して、Saussure 自身の回答は次のような驚くべきものである。

“Nous n'établissons aucune difference sérieuse entre les termes *valeur, sens, signification, fonction* ou *emploi* d'une forme, ni même avec *l'idée* comme *contenu* d'une forme ;” [斜体部原文ママ]

(Bouquet & Engler, 2002 : 28)

“われわれは、ある形式の価値、意味〔サンス〕、意義〔シニフィケーション〕、機能ないしは用法の間に、いかなる〈重要な〉差異も設けないし、またある形式の内容〔として〕の観念との間にさえも差異を設けることはしない。” [傍点部原文ママ]

(松澤和宏訳, 2013 : 26)

Saussure のこの言葉は、記号の差異と同音異義の問題について解答を与えてくれる。すなわち、Saussure の自筆草稿における言語記号の差異という記述は、3. で取り上げた CLG での“言語には差異しかない（下線部原文ママ）、ということに帰する”という記述とは正反対なのである。CLG におけるこの一文のために、言語学者はこれまでなんと無駄な遠回りをさせられたことか。

Saussure は言語記号を「記号内容」と「聴覚映像」という二つの側面に存在する関係という観点から捉えた。記号内容と聴覚映像の間にある構造的関係はこうして一つの言語記号を構成し、言語はこれらの言語記号によって成立するのである。その意味で言語は“観念を表現する記号の体系”なのである。このようにして Saussure の唱えた言語の体系は、プラハ学派を通じて音韻論の確立に寄与し、更にその後コペンハーゲン学派による構造的な分析手法を基に、その上に構築される現代言語学の中心的な考え方として構造主義という名の下に、音韻論や人類学への応用を超え、その根本的な思想部分においてヨーロッパ近代の思考様式にまで拡張していく。

しかしここに上げたものはある種具体的な言葉の対立である。抽象的なものに対して果たして対立そのものがありえるのであろうか。この点について、国広（2010：3）<sup>(24)</sup>は以下のようにその基盤を疑問視する。

“構造主義はまず論理的にいつて成立しない。抽象的な記号の対立とは何ぞやということである。対立は音声なり視覚的な符号なり、知覚的に区別が感じられるものがあって初めて成立するものであるから、抽象的な対立というものはありえない。ソシールはこの考えを「言語には差異しかない」という表現でまとめているが、具体的な知覚実質なしには差異は存在しえない。”

差異という主張に目を向ければ、確かに国広の指摘のとおりである。しかしこれは Bally と Sechehaye による CLG での主張に限るものであり、実際の Saussure の言葉は Bouquet & Engler (2002: 28) に見たように、CLG における記述とは正反対のものである。このことは、国広が Bally と Sechehaye による CLG での主張を基に反論を展開していたとはいえ、これまでの国広の指摘がいかに正しかったかということを歴史的にも Saussure の真の言葉からも逆に証明するものである。とすれば、これまでの構造主義とそこでの言語研究とは何であったのか、再考を迫られる時期に来ているであろう。同音異義と多義の問題を Saussure の学説でどのように解決できるのか。これらは現代言語学に課せられた課題であるとともに、そこに構造主義言語学の意味の問題の一片が姿を現わしている。

また、言語を実存体とする考えや Saussure 学説における最大の遺産にして最大の謎である langue という考えなど、言語記号の差異の問題の他にも Saussure 学説における問題点は数多く存在するが、紙幅の関係から、それらの説明は次の機会に譲りたいと思う。

## 文 献

- (1) Saussure, F. de. *Cours de Linguistique Générale*. (1916), Paris: Payot, (小林英夫訳, “言語学原論” (1928), 岡書院) / Saussure, F. de. *Cours de Linguistique Générale*. (1916), Paris: Payot (小林英夫訳, “改訳新版言語学原論” (1940), 岩波書店) / Saussure, F. de. *Cours de Linguistique Générale*. (1916) Paris: Payot (小林英夫訳, “一般言語学講義” (1972), 岩波書店) を参照。今日, ソシユールの学説を広く知らしめたものとして, 小林英夫訳, “一般言語学講義” (1940), (岩波書店) が最も一般的である。よって本稿でも日本語訳は小林訳を用いる。
- (2) 国広哲弥, “言語と概念”『東京大学言語論集' 85』(1985), 東京大学文学部言語学研究室, pp. 17-23.
- (3) CLG と Saussure の実際の講義との違いはタイトルはおろか全般的な構成まで多岐にわたり, 小松 (2011: 40-42) によれば, Bally と Sechehaye による CLG の最も大きな特徴の一つは, Saussure の実際の講義とはその構成の順番が逆になっていることである。CLG では, 「序論」, 「音韻論」, 「記号理論」, 「共時言語学」, 「通時言語学」, 「言語地理学」, 「結論」という流れで言語の一般理論から始まり, 具体論としての各国別の言語を扱う言語地理論が最後に回されている。しかし Saussure の実際の講義では逆に, ヨーロッパ各地の具体的言語の諸形態が述べられ, その後でそれらを一般論に抽象する形になっている。またこのことは, Engler 版の断章番号七十三番の, “Pour se faire une idée plus approfondie de la linguistique deux chemins sont possibles : une méthode théorique (synthèse) et une method pratique (analyse). Nous suivrons la seconde (後略)” “言語学の問題を掘り下げるには二つの方法が考えられる。理論的方法 (総合) と実際的方法 (分析) である。我々は後者の方法に従う。” (松中訳) という言葉は CLG の同番号の内容に対応せず, 削除されている。小松英輔 (2011: 43) が指摘するとおり, Saussure は langue の一般理論的な言語学ではなく, 言語の外的な側面の諸事実を個々に指摘することから始め, その後にそれらの一般論を展開していたが, この構図を言語学とは langue を研究する学問であるとしたのは Dégallier のノートを自分の言葉に直して掘り起こした Sechehaye の責任であり, Bally と Sechehaye による CLG は Sechehaye によるこうした独断と再創作を完全に受け継いでいる。
- (4) Godel, R. *Les Sources Manuscrites du Cours de linguistique générale*. (1957), Genève, Droz / Paris, Minard.
- (5) その代表的なものを上げれば, 丸山圭三郎, “ソシユールにおける体系と概念と二つの〈構造〉”『理想』第456号 (1971), 理想社, pp. 26-43. / 丸山圭三郎, “ソシユールの思想” (1981), 岩波書店 / 丸山圭三郎, “ソシユールを読む” (1983), 岩波書店 / 丸山圭三郎, “〈現前の記号学〉の解体”『思想』4月号 (1984), 岩波書店, pp. 30-54. などがある。なお, こうした経緯と詳細については, 松中完二, “認知的言語研究の先駆者としての時枝誠記” 国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』第27号 (2001), pp. 197-211. / 松中完二, “時枝・服部論争の再考察 (I) —言語研究の原点的問題として—” 敬愛大学経済学会編『敬愛大学研究論集』第69号 (2005), pp. 109-146. / 松中完二, “時枝・服部論争の再考察 (II) —言語研究の原点的問題として—” 敬愛大学経済学会編『敬愛大学研究論集』第70号 (2006), pp. 175-212. / 松中完二, “時枝・服部論争の再考察 (III) —言語研究の原点的問題として—” 敬愛大学経済学会編『敬愛大学研究論集』第74号 (2008), pp. 49-109. を参照のこと。
- (6) 本文 pp. 3 - 4. の Eisuke, Komatsu (1993: 354-355) とその邦訳である相原奈津江・秋津伶訳 (2003: 260-261) を参照のこと。
- (7) 国広哲弥, “言語と概念”『東京大学言語論集' 85』東京大学文学部言語学研究室 (1985), pp. 17-23. / 国広哲弥, “ソシユール構造主義は成立しない”『研究年報』第20号 (2006), 日本エドワード・サビア協会, pp. 17-22.
- (8) 松澤和宏, “生成論の探究” (2003), 名古屋大学出版会。
- (9) 松澤和宏, “ソシユール『一般言語学講義』”『月刊言語』1月号 (2006), 大修館書店, pp. 96-101.
- (10) 加賀野井秀一, “20世紀言語学入門: 現代思想の原点” (1995), 講談社。
- (11) Bouquet, S. & Engler, R. *Ferdinand de Saussure, Écrits de linguistique générale*. (2002), Paris: Gallimard. (松澤和宏校註・訳, “フェルディナン・ド・ソシユール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』” (2013), 岩波書店)

- (12) Engler, R. *Cours de Linguistique Générale, Edition Critique* (1968), Wiesbaden: Harrassowitz.
- (13) 丸山圭三郎, “ソシユールを読む” (1983), 岩波書店.
- (14) 丸山圭三郎, “ソシユールの思想” (1981), 岩波書店.
- (15) 国広哲弥, “言語と概念”『東京大学言語論集' 85』東京大学文学部言語学研究室 (1985), pp. 17-23.
- (16) 国広哲弥, “語の意味をめぐって” 澤田治美編, 『ひつじ意味論講座』第1巻 (2010), ひつじ書房, pp. 1-22.
- (17) 町田健, “ソシユールと言語学” (2004), 講談社.
- (18) 加賀野井秀一, “知の教科書ソシユール” (2004), 講談社.
- (19) 瀬戸賢一, “よくわかる比喩言葉の根っこをもっと知ろう” (2005), 研究社.
- (20) 国広哲弥, “ソシユール構造主義は成立しない”『研究年報』第20号 (2006), 日本エドワード・サピア協会, pp. 17-22.
- (21) Bouissac, P. *Saussure: a guide for the perplexed*. (2010) London: Continuum. (鷲尾翠訳, “ソシユール超入門” (2012), 講談社.)
- (22) Hawkes, T. *Structuralism and Semiotics*. (1977), Berkeley: University of California. (池上嘉彦他訳, “構造主義と記号論” (1979), 紀伊国屋書店.)
- (23) 河本英夫, “言語システム”『思想』第11号, No. 1003 (2007), 岩波書店, pp. 179-193.
- (24) 国広哲弥, “語の意味をめぐって” 澤田治美編, 『ひつじ意味論講座』第1巻 (2010), ひつじ書房, pp. 1-22.